

意味に物を考へなければいゝまい。故に皇運といふ中には建國の大精神——往いては天下を光宅する大精神があることを理解されなければ、本末が明かにならぬ。又吾々國民が大和魂を發揮するとか、國民精神を發揮するといつても、その人の精神の奥に明德を認め、明德を磨くには天道を認めるといふ事がなければ倫理の本末は立たぬ、この事は初めに論じた如く、儒教、佛教、神ながらの教、みな一貫して居る所であります。學校教育に於ては、天道明德といふ事が力強く教へられて居るが、随つてそれと直接關係のある宗教の信仰——殊に佛教の信仰の如きは最も適切にこの天道明德の教を一層明かにして居るものである。それは天道といふ言葉だけ言つても今日の思想では足りないのである、天道とは何ぞと推しこんで見ると、宇宙には生命を認めなければならぬ、生命を人格として認めなければならぬ……段々やつて行くときには佛教の解釋の方が整備して居る。それが無ければやはり天道といつても抽象的の事になつて「あゝ程として己まづ」といふやうな事だけでは信仰は出來ないことになる。今

は哲學の思想が展ひて居る。それ故に「天道まで行くけれども佛教へ入るのは嫌だ」といふやうな頭腦は、今後の思想界を導くことは出來ぬ。佛教は我が日本の文化の中心を成して來たのである。

それ故に本末輕重を明かにしなければならぬ、是は唯だ教育勅語の問題ばかりではない、西洋からデモクラシーの説が來てもその通りである。それはデモクラシーといふ事にも良い所がある、けれども併し是は大體壓迫でもされた時分に起る道徳である、自由といふ事もやはり壓迫に對して起る言葉である。家庭に於て親が親切にして汗水流して稼いだ錢を以て子供を養ひ、自分の食ふ物は節約して子供の爲に盡して居るといふ時に、子供が「俺に自由を與へよ」と言つた所が何も意味を成さぬぢやないか、「有難いこととあります」と言つて感謝してこそ初めて意味があるけれども、非常に親切にして呉れて、自分は食ふ物も食はず、子供には團子を買つて來て呉れるのに、團子を食ひながら「俺に自由を與へよ」と言つても、そんな事が何になる？自由といふや